

個人と集団の良い関係

藤 中 隆 久*

A good relationship between individual and group

Takahisa FUJINAKA

1. 問題と目的

熊本大学教育学部は、令和元年5月から、いわゆる「益城プロジェクト」を開始した。これは、平成28年4月に起こった熊本地震後の益城地区の教育領域に関わる被災地支援活動のプログラムである。被災地においては、被災の数年後でも、学力低下が起こったりあるいは不登校が増えたりする事が考えられるので、地元の国立大学教育学部として、継続可能な支援をつづけてゆこうという意図である。

現在、①木山仮設住宅内とテクノ団地仮設住宅内の集会所に放課後集まる子ども達の勉強相手になる学生ボランティアを熊本大学教育学部で募り、両集会所に派遣する。②益城中学と木山中学の定期考査の前に、各中学で数回の勉強会を開催するので、その会で中学生に勉強を教える学生ボランティアを熊本大学教育学部で募り、両中学の勉強会に派遣する。③益城中学で別室登校をしている子どもの相手をする学生ボランティアを熊本大学教育学部で募り、派遣する。以上の活動が、現在、動き始めている。

①②の活動は、NPO 法人のカタリバがはじめたものであり、令和元年5月から、熊本大学教育学部もカタリバと分担して、活動に参入したわけである。③の活動は、熊本市教育委員会と熊本大学教育学部が提携した熊本市内の不登校支援事業「ユア・フレンド活動」をモデルとしている。震災後増えている益城町の不登校に、熊本大学教育学部として可能な支援を現在模索しているところである。③については令和元年10月の時点では、益城中学で別室登校をする子どもの元に大学生を派遣して、別室において交流を図るプログラムを検討中である。①②の活動は、令和元年9月の時点で、軌道に乗りつつある。

しかし、①の活動をするボランティア学生は、葛藤もあるようなのである。学生ボランティアがイメージする勉強会の指導という行為が、勉強会に来る子どもに対して思い通りにできていないということに、

葛藤を感じるという問題である。

仮設住宅内の集会所の勉強会には、勉強をするために来る子どもがいる。そのような子どもに対しては、ボランティア学生は、勉強の相手をする。また、勉強はほとんどしないで、おしゃべりに興じる子どももいる。そのような子どもには、ボランティア学生は、おしゃべりの相手になったりする。しかし、おしゃべりがエスカレートして声が大きくなったり、あるいは、言葉遣いが悪くなったり、さらには、おしゃべりだけではおさまらず騒いだり、遊んだりし始めると、ボランティア学生は、何らかの指導的な行為をしたくなる。しかし、勉強会とはいえ、被災地の集会所における子どもの勉強会において、指導的行為をすることが適切なのかと考えると、そこで葛藤するのである。

このような葛藤が起こることは、ある程度予測されていたことでもある。平成30年度後期の熊本大学大学院教育学研究科教職大学院において、筆者が担当する「学校と地域社会」という授業科目の中で、地域連携活動の一環として、木山仮設住宅内の集会所に放課後集まる子ども達の支援活動（当時は、NPO 法人カタリバが主催する活動）を教職大学院の大学院生が体験した。木山仮設内の集会所に、子ども達は、放課後に勉強をしにきているという名目である。教職大学院生は、集会所の勉強会に来る子ども達に、勉強を教えることを目的とした地域援助体験をするという名目である。しかし、大学院生たちが、この活動体験においてもっともやりにくかったことは、集会所における勉強会は、子ども達にとっては必ずしも勉強をする会になっていないという現実であった。

勉強会という名目ながら、おしゃべりやゲームに興じる一部の子どもの行動が、勉強を教えようという意識の大学院生には目に余り、しかし、そのような行動に対して、注意をしてよいものなのかという葛藤であった。特に、教育委員会から派遣されている現職教員の大学院生に、この葛藤が大きかったようである。勉強会にきて、おしゃべりやゲームをす

* 熊本大学大学院教育学研究科

る子どもを、教師としては注意したい。しかし、被災者の仮設住宅内の勉強会という集まりでは、教師としての当たり前の価値観が必ずしも正しいというわけではなさそうであると考えれば、子ども達のおしゃべりや遊び行動を注意してよいわけでもなさそうなので、そこで葛藤を感じるのである。

益城プロジェクトにおけるボランティア学生の葛藤も、前年度に勉強会の支援体験をした教職大学院生の葛藤も、同じ性質のものであらうと思われる。勉強会である限りは、勉強をすることがそこに来る子ども達には課せられている。そして、勉強会である限りは、勉強を支援することが、ボランティア学生としての自分たちの使命である。それにもかかわらず、勉強をしない子どもも多くいて、ボランティア学生としての使命を、現状ではあまり果たしてはいないが、それを果たすためには、勉強をしようとする子どもや、あるいは、勉強の邪魔になっているかもしれない子どもに対して、どう振る舞えば良いかわからないという感覚が、葛藤の原因である。

このような葛藤は、どうすれば解消されるだろうか。それは、①被災地の勉強会とは、いかなる機能を果たすべきなのか。そして②その機能を果たすための指導とは、どうあるべきなのか、この二点を理論的に明らかにすることではないだろうか。本論文では、この二点について、考察することを目的とする。この二点が明らかにできれば、益城プロジェクトの仮設住宅内集会所の勉強会支援の活動をするボランティア学生の役割葛藤も、かなり軽減されるのではないだろうか。

2. 益城プロジェクトの勉強会が果たしている機能

(1) なぜ、勉強会に来るのか

勉強会は、勉強をするための会と考えてよいだろう。被災して仮設住宅住まいになると、自宅に住んでいた頃に比べて、学習環境が劣化し、勉強が思うように進まないということは十分に考えられる。学習環境の劣化とは、例えば、勉強部屋が確保できない、塾に通えなくなった、精神的に安定しないので勉強時間を確保できない、仮設という環境では勉強に集中して取り組む気にならない、等々である。そのような状態にある子どもたちのために、勉強する場所や、精神の安定や、勉強を教えてくれるボランティアの大学生を提供すること等が、被災地の仮設住宅の集会所における勉強会の一義的な意義と考えて良いであろう。確かに、このような要求が満たされる事が、子どもにとって勉強会に出席する理由の

一端にはなるだろう。しかし、このような理由だけで、被災地の子子ども達が勉強会に出席しているわけでもなさそうなのである。被災地の子子ども達は、なぜ、勉強会に来るのだろうか。子ども達は、勉強会には、実は勉強以外の欲求をも満たすために来ているのではないだろうか。

仮設住宅住まいでは、勉強部屋や塾など物理的に不足するものもあるだろうが、精神的な不足感も子ども達は感じていると思われる。その不足感は勉強会に参加することで補われていると考えられないだろうか。精神的不足感とは何か。それは、**安心感を感じられる人たちが集まる集団内で過ごす体験の不足感**というものであらうというのが、このプロジェクトに参加して、筆者が感じたことである。被災地の子子ども達が勉強会という集団で過ごす体験の意義を考察するために、まずは、一般的に集団内で過ごす体験が、子どもの精神に何をもたらしているのだろうかということを考察してみたい。

(2) 集団が果たす機能

少し、唐突ではあるが不登校の問題を考えてみたい。なぜなら、不登校の問題を考えることで、集団内で過ごす体験が子どもの精神に何をもたらしているかが、明らかになると考えられるからである。

不登校については、ここ30年以上、さんざん議論されてきている。不登校のタイプ分けなどもさまざまなものがあり、不登校になる理由も、いろいろ論じられている。しかし、おおざっぱには、不登校とは、集団からの圧力が苦しいと感じている子どもが一部にいて、そのような子どもたちが圧力に耐えきれなくなったときに取る学校回避的な行動と見て、それほど間違っていないと筆者は考えている。多くの子どもにとっては、それほどの苦痛とは感じられていない集団からの圧力も、一部の子どもにとっては耐えがたいほどの強さに感じられるということは、十分にあり得るだろう。そして、耐えがたいほどの圧力にさらされ続けたとき、その圧力を回避しようとするのは、誰にとっても、当たり前の行動であると思われる。耐え難い圧力にさらされれば、その圧力から回避する行動をとるのは、誰にでも起こることで、そういう意味でも、不登校は誰にでも起こりうることといってよい。

では、集団からの圧力とは、何をどのような形で要求してくるものなのであろうか。それは、以下のようなものであると筆者は考えている。

- ・「集団の一員であれ。そのためには、集団に同調した行動を取るべきである」
- ・「集団の一員としての責任を果たせ。そのために

は、集団行動からはみ出て、集団を崩壊させることにつながりかねない行動は慎め」

- ・「集団内の競争に勝ち抜け」
- ・「集団の一員として、集団に貢献しろ。そのためには自らの能力を向上させ、貢献できる人材になるための努力をすべきである」

このような圧力は、集団が個人に対して、必ずしも意識的に向けてくるものではない。しかし、意識はしていないのだが、集団が集団である限りは、必ず持っている圧力ではある。また、集団は個人に対して、自己利益を放棄してひたすら集団に貢献しろという圧力を向けてくるわけでもない。むしろ、集団に貢献する前に、まずは、個人は自己利益のために努力をすべしと要求してきている。これは集団内の競争に勝てという圧力である。まずは、集団内の競争に勝つことは、自己利益のためなのである。そして、自分の利益のために集団内の競争に勝つことが、集団に貢献しろという圧力のルーツでもある。自己利益のために個人個人が勝つ努力をすれば、そこには競争が生まれ、競争によって切磋琢磨することで集団は発展する。つまり、一人一人の自己利益のための努力が、結果的に集団の利益となり、集団に貢献することになるのである。あたかも、アダム＝スミスが述べたように、個人はあくまでも自己利益のための経済活動を展開しているのだが、「見えざる手」の導きにより、結果的に国家の利益になるようなものである。なので、個人にとっては、集団からの圧力という存在は不快なものではあるのだが、集団からの圧力は意識的なものでもなく、悪意でもなく、むしろ必要なものなのであるといえるのである。では、なぜ、集団は個人に圧力をかけるものなのだろうか。

集団とは、個人の集合体である。とすれば、個人に圧力をかけている集団の意思とは、つまり、もとをたどれば個人一人一人に由来するものである。では、なぜ、集団の構成員の一人一人は、集団の構成員の一人一人に圧力をかけるのだろうか。それは、圧力がなければ、集団は崩壊する可能性があるからである。一人一人の構成員にとっては、集団は崩壊させられないものである。なぜなら、集団の存在によって、集団の構成員の一人一人に利益を得ることが出来、かつ、構成員の一人一人のリスクを軽減されているからである。

構成員の一人一人にとっては、集団を維持することは即ち自己利益につながり、集団を発展させることが即ち一人一人の自己利益を拡大することにつながるということを、構成員の一人一人が、無意識にでも良く理解しているのである。また、このような

圧力がなければ、集団というものは容易に衰退し崩壊し、崩壊すれば即ち一人一人の自己利益が減少し、それまでは集団が吸収してきたリスクに、一人一人が直接さらされる結果となるということを、構成員の一人一人が無意識にでも良く理解しているのである。集団が衰退、崩壊してしまえば、一人一人の自己利益も衰退、崩壊し、一人一人は様々なリスクに直接さらされることになるので、一人一人の構成員は何としても集団を維持しようとする。集団を維持するためには、一人一人の構成員が一人一人の構成員に対して、圧力をかけ続けなければならない。このような集団から個人への圧力が続くことにより、集団は集団として維持されているのである。

このような圧力が全く存在しないならば、それは、もう、集団の機能を果たしているとは言えず、ただの人の集まりである。ただの人の集まりならば、その集まりから利益を得ることも、その集まりが個人のリスクを吸収することもあり得ない。ただの人の集まりだけが存在しても、そこにいる人たちは、利益は得られないし、リスクには直接さらされるだけとなる。

では、集団にいたることゆえに得られる自己利益とはどのようなものなのだろうか。一つの答えは、アブラハム＝マズローの欲求階層説に見いだされる。それは以下のような欲求の階層である。

1. 生理的欲求
2. 安全の欲求
3. 承認欲求
4. 所属と愛の欲求
5. 自己実現欲求

この5段階の欲求が、ある程度の順序性を持って充足されることが、即ち、人生を充足させるにつながるとマズローは考えたのである。確かに生理的な欲求や安全性の欲求は、人間の基本的な欲求と言ってよいであろう。これらの欲求が満たされないと、まず、生きてゆくことができない。しかし、この2つの段階の欲求が満たされれば、精神的にも十分に充実した人生であるとは言えない事も確かである。生きることができるというのは、十分な自己利益ではあるが、この二つが満たされれば身体的には満たされるが、この二つだけでは、精神的な充実という利益も得られているとは言えないだろう、人はパンのみにて生きるにあらずである。

この二つの次には、「承認されたい」とか「所属する集団が欲しい」などと考えるのも、自然な人間の姿であると言えよう。これが、精神的な充実という自己利益である。

そして、これらのどの階層の欲求を充足させるこ

とも、集団の存在がなければ不可能であるといっ
 よい。食べ物、飲み物が十分にある事で、生理的欲
 求は満たされるが、現代社会において、これらを一
 人で手に入れることは不可能である。自給自足をす
 るにしても限度がある。集団という存在（産業の分
 業や統治機能や流通機能などを持つ集団）がないと、
 安全な食べ物飲み物は手に入れられず、生理的欲求
 は満たされないのである。また、我々の一人一人の
 身体的安全は、国家権力という機能を持つ集団によ
 って守られているのである。国家という強い集団がな
 ければ、一人一人は万人の万人に対する闘争が繰り
 広げられている荒野に放り出され、身体的安全の保
 証されない状態になるであろう。社会契約説を唱え
 たトマス＝ホッブスが考えた通りである。また、承
 認欲求は、他者が存在して初めて満たされるもので
 ある。他者が存在しなければ承認欲求が満たされる
 ことは決してない。所属の欲求にいたっては文字通
 り集団がなくてはかなえられない。自己実現欲求も、
 他者や集団にとって自らの役割の大きさを顧みた結
 果、かなえられたと感じられるものであるから、や
 はり、集団が存在しなければ満たされることはない。
 つまり、5段階の欲求をかなえてゆくことが、自己
 利益の多い人生を生きてゆくということではあるが、
 その欲求の全てが、集団が存在しない限り、決して
 かなえられないものなのである。ゆえに、人間とは、
 自己利益を上げるためには、必ず集団の存在を必要
 とするといっよよいのである。

ならば、集団を維持したり発展させたりすること
 につながる思想を持ったり言動をしたりすることは、
 集団に属する全ての個人が果たすべき義務であるとも
 いえる。また、一方で、集団を衰退させたり崩壊
 させたりすることにつながる思想や言動は、集団に
 属する全ての個人がやってはいけない禁止事項であ
 るとも言えるのである。

では集団を維持したり集団を発展させるための必
 要な要因としては、どのようなものが考えられるだ
 ろうか。

- ・人口
- ・集団構成員一人一人の知的能力
- ・集団構成員一人一人の肉体的な能力
- ・構成員一人一人の集団に対する帰属意識（精神的
 なつながり・絆）
- ・集団が所有する富・資産（お金）

これらのものが多いほど、集団の維持は安定し、
 強化され、発展してゆくはずである。集団内に多く
 の人がいて、その一人一人が賢く、強く、集団への
 帰属意識や絆が強ければ、集団により多くの富をも
 たらすことになり、結果として、その集団は崩壊の

恐れから、より遠くなってゆくのである。自らが属
 する集団がそのような集団であることを、集団内の
 構成員の一人一人は、明確には意識せずとも望んで
 いるはずである。また、これと逆の方向、つまり、
 集団の人口を減らしたり、一人一人が知的能力や肉
 体的能力を低めることに貢献したり、構成員の帰属
 意識を下げたり、精神的絆を破壊することに貢献し
 たりすることが、集団の衰退、崩壊につながる。自
 らの属する集団がこうならないことを、集団の構
 成員の一人一人は、明確には意識せずとも望んで
 いるはずである。集団の構成員の一人一人は、集団強化
 要因を高め、衰退、崩壊要因を下げるための努力を
 すべしというメッセージが、集団から個人に向かう
 圧力として作用しているということである。

ここまで、集団と個人の関係を考えてみた。この
 ように考えてみると、不登校の原因もおおむね理解
 可能となってくる。現代の学校には、このような個
 人と集団の関係を体感させる機能があると考えられ
 る。学校とは、社会の将来の担い手を育成している
 場所であると考えている学校関係者は多いはずであ
 る。一人一人の子どもが将来の社会の担い手として
 育ててゆくためには、学生時代の過ごし方として、
 自己利益のための努力をさせる→その努力の結果、
 集団から利益を受けていることを感覚的に感じられ
 るようにさせる→その結果、集団に対する帰属意識
 を感じさせ、集団の絆を作ることの重要性を感じさ
 せる→その結果、集団を維持、発展させることの重
 要性を感じさせる。この一連のプロセスを学校で一
 人一人の子どもに感じさせることが、個人と集団の
 関係を理解させることにつながり、ひいてはその理
 解が、将来、社会の一員となったときに、社会集団
 を維持、発展させようという感覚を持たせることに
 つながり、社会集団を衰退、崩壊させてはいけない
 という感覚を持たせることにつながるのである。な
 ので、将来の社会という集団を維持、発展させる担
 い手が、学生のうちから、集団の大切さを実感する
 ために、学校（集団）は、個人に圧力をかけ続ける。
 しかし、その時、集団からの圧力が強すぎると感じ
 る子どもも集団内には必ず一定数存在している。そ
 の子達が、集団（学校）から受ける圧力に耐えきれ
 ないと感じたときに、その圧力から逃げ出すことが、
 つまり、不登校と考えて良いだろう。

(3) 学校という集団が果たすべき機能

では、学校における集団の圧力とは、具体的には
 どのような形を取るだろうか。それは以下の通りで
 ある。

集団内の競争に勝って自己利益を大きくするため

に、(それは即ち集団にとっての有用な人材となるために) 一人一人が努力すべきである。「一生懸命に勉強をなさい」「授業中は、先生の話ちゃんと聞きなさい」

集団内の他のメンバーも、競争に勝って自己利益を大きくするための努力は、それは即ち集団にとっての有用な人材となるために努力をしているのだから、それを妨害する行動を取ることは許されない。「真面目にやっている人の邪魔をしてはいけません」「自分勝手な行動を取ってはいけません」「集団の決まりに従いなさい」

集団内の精神的絆を作るための努力も必要である。「お互い協力しなさい」「仲良くしなさい」「みんなと同じようにしなさい」

そのようなメッセージに従い、努力を続けられる人は、より多くの自己利益を得ることが出来る。そして、より多くの自己利益を得られれば、集団から承認されたり、集団にいる事の恩恵も与えられている(つまり、いろんな段階の欲求が満たされている)と感じられる。集団から多くの利益を与えられたと感じられれば、その集団に対する帰属意識も強くなり、帰属意識の強い人が多くいれば、構成員間の精神的絆が強くなり、結果として、集団に貢献をしようという考えになり、その集団は崩壊の恐れからはより遠くなってゆくのである。これが将来の社会の担い手という意識を持った個人の育成になるのである。

集団を衰退、崩壊の危機に導く要因は、強化する要因の逆である。一人一人の知的能力が低下する事、一人一人の肉体的能力が低下する事、集団の構成員が所属する集団に帰属意識を持ちえず、構成員間の精神的絆がなくなっていくこと、その結果、所属する集団に富や資産をもたらそうとしなくなることである。

社会という集団の将来の担い手を育成する学校というところは、集団の維持や強化につながると思われる行動が奨励され、衰退や崩壊に導くと思われる行動は、禁止されるところなのである。そして、ある行動が奨励されたり、ある行動が禁止とされたりするということが、すなわち、集団の圧力ということである。その圧力は必要であることは、前述した通りである。問題は、奨励されている行動が本当に集団の維持や強化につながったり、禁止されている行動が本当に集団の衰退や崩壊につながったりしているのかということなのである。学校としては、集団の維持や強化につながると思って奨励している行動が、実は、集団の維持や強化につながるものではなかったというようにあるのではないだ

ろうか。また、集団を衰退させることにつながると思って禁止とされている行動が、実は、集団の衰退や崩壊につながるものではなかったというようにあることも、ありうるのではないだろうか。

集団の維持や強化に資すると思われていて、奨励されている行動を考えてみよう。学校はまず知的能力や肉体的能力を高めることが奨励される。そして、その能力が高まれば、集団から承認されるという自己利益が高まるので、学校はまず自己利益を高めることを奨励しているのである。一人一人の子どもに対して、自己利益を高めることを奨励し、援助することが学校であるならば必ず果たすべき機能であるともいえる。自己利益を高め、その結果集団から認められることを自己確立と言い換えても良い。ならば、学校は一人一人の子どもの自己確立の援助をする事を、ミッションとしていると言ってもよいであろう。しかし、知的能力や肉体的能力というものは、他者との比較によって、高い低いが実感できるものである。他者との比較によって実感できるものである以上、そこには当然競争が起こる。そして、競争的環境におかれた子どもは「競争に勝て」というメッセージに常にさらされることになる。ある程度の競争は、自己確立のためにも集団の維持、発展のためにも必要である。しかし、競争が激しくなると、結局、「競争に勝て」というメッセージに子どもは常にさらされ続けて、その圧力の強い集団内にいることを不快に感じる子どもが増える。集団の圧力を不快と感じる子どもが増えれば、それは、所属集団への帰属意識をもてない子どもが増えるということである。そのような集団においては、結果的に構成員同士の絆が弱くなってゆく。集団を維持、強化するために必要だった競争だが、それが行き過ぎると集団内の絆がなくなってゆき、集団の衰退、崩壊につながりかねないのである。

あるいは、集団を衰退、崩壊させないためには、構成員同士の絆を強める必要がある。「お互いに協力しなさい」「仲良くしなさい」というメッセージを与え、協力することや仲の良さを奨励し、それが実現出来れば、絆を強めることにつながる。しかし、それが強すぎると、それを圧力と感じて不快を感じる子どもは増える可能性がある。集団に対して不快を感じる子どもが増えれば、それは、集団への帰属意識をもてない子どもが増えるということであり、そのような集団においては、結果的に構成員同士の絆は弱い物になる。

つまり、競争の圧力も、協力・同調の圧力も、強すぎると、帰属意識や精神的絆を減少させる恐れがある。集団を維持、強化する目的で、競争圧力や同

調圧力が強められてはいるのだが、強すぎると、むしろ集団が衰退、崩壊の危機にさらされかねないのである。したがって、学校には個人と集団のよい関係を実感させるミッションがあるにしても、強すぎる競争圧力や、同調圧力は、むしろ、その悪い関係を実感させることにつながりかねないのである。

ゆえに、努力を奨励することはいいのだが、それが過熱し競争が苛酷になれば、不登校は増える。また、協力・同調を奨励することはいいのだが、それが過熱し自由が失われれば、やはり不登校は増える。この点に、学校は細心の注意を払うべきである。努力して、知的能力や肉体的能力を高めた子どもが、集団内で承認欲求が満たされるという構造を、学校は変えることはできない。この構造を学生時代に実感できた子どもたちが、将来社会の担い手となり、この構造を再現することで社会集団の維持、発展も実現させられるからである。

しかし、この構造がいきすぎれば、むしろ、集団を衰退、崩壊させることにもなるということも、学校関係者は考えておいた方がいい。能力の評価に多様性を持たせ、様々な能力を評価すれば、様々な子どもの承認欲求は満たされる。

(4) 被災地の勉強会が果たすべき機能

ここまで、一般論として集団が果たすべき機能と、学校が果たすべき機能を考察した。以上の考察を受けて、ここからは、被災地の勉強会が果たすべき機能を考えてみたい。

集団は、集団維持・発展のために、あるいは、集団を衰退・崩壊させないために、構成員一人一人に、「競争に勝て」という圧力をかけるし、また、「協力・協調」という圧力もかける。社会集団を維持、発展させるためには、競争は必要であり、また、社会集団を衰退、崩壊させないためには、協力・協調、絆は必要不可欠である。将来の社会の担い手を育てるために、学校は競争で勝つ努力をして自己利益を上げることを実感させることや、協力・協調して絆を作ることを実感させる場となるべきである。しかし、被災地の勉強会で体験させるべき集団感覚は、競争原理と協調原理が組み込まれた学校の集団感覚とは、少し異なるのではないだろうか。学校ならば、競争原理が支配的である事はやむを得ない。また、協調原理も絶対に必要である。しかし、被災地の勉強会には、そのどちらの原理も強くない方がよいのではないだろうか。いや、むしろ、なくても良いとさえ思われる。

被災地の勉強会とは、集団の原理を体験させ、社会の担い手の育成をするところではないはずである。

いや、広い意味では、被災地の勉強会も社会の担い手の育成の場所なのだろうが、学校とは方略が異なる場所であるべきだろう。

被災地の勉強会に来る子どもは、学力を向上させるためだけに来ているわけではない。学力が向上するに越したことはない。しかし、学習環境が劣化し、勉強時間の確保がむづかしくなったり、不安定な気持ちになり勉強に集中できなくなりもする子が、たとえ学力が向上しないとしても、承認され、受け入れられる集団があるという感覚を体験するために来ているのではないだろうか。被災すれば、心細くもなる。世間から自分たちが取り残されてゆくような感覚を感じるかもしれない。そんな時でも、自分が承認される集団が存在していると実感できることは、心強いことである。

C・R・ロジャーズの唱えたカウンセラーの3条件のうちの一つが「無条件の受容」である。カウンセラーはクライアントを、条件を付けずに受容すべきであるという主張である。条件を付けた受容とは、例えば、テストの点数がよければほめてあげるとか、部活の大会でいい成績をあげればほめてあげるといようなことである。ほめられるためには、テストや大会の好結果という条件を満たす必要がある。学校は、「～ができれば」「～がよければ」という条件付きで子どもを頑張らせて、将来の社会の担い手を育てる方略をとっている。この方略は競争原理に則っているので間違っていない。しかし、これでは、すべての構成員が一人残らず受容されることはありえない。いくら、評価基準を多様にして、多様な条件を設定しても、条件付きの受容である限り、どんな条件もクリアできない子どもは必ずいる。そうなったとき、どんな条件をも満たせなかったので、集団に受容、承認されない子どもは集団の強化に貢献できないのだから、受容されなくても、それは仕方ないことなのだろうか。

そのような考え方は、結局は、集団の衰退、崩壊につながると筆者は考えている。競争圧力や協調圧力をかけすぎることが、実は集団を衰退させたり崩壊させたりすることにつながることは、前述したとおりである。圧力が強すぎれば、集団に帰属意識を持ってない人が増えるが、集団に帰属意識を持ってない人が増えれば、集団の絆が弱まるであろう。条件付きの受容も、それと同様ではないだろうか。条件付きの受容である限り、その条件をクリアできる人とできない人がいて、そこには、競争が生じる。競争である限り、現在は、条件をクリアできているので、受容、承認されている人も、将来は、条件をクリアできず、受容、承認されなくなる可能性がある。条

件をクリアできない人＝競争に勝てない人は受容、承認されることはないという集団にいと、競争に勝っている側も決して心から安心はできない。明日は我が身かもしれない。今はいいけど、明日は扱いが変わるかもしれない集団にいたら、人は、その集団に対して帰属意識や愛着を持てるものなのだろうか。集団に対する帰属意識や愛着を持ってない人が増えれば、集団の絆は弱くなる。集団は決してどの一人も見捨てないというメッセージを送りつづけ、特に、弱い立場の人も受容されていることを実感していることで、帰属意識や絆が保たれるのである。条件付きの受容によって競争させ、集団を発展させる事は必要ではあるが、その一方で、無条件で受容される事も経験し、自分が弱い立場になったときでも、集団から受容されるという感覚を、全構成員が持つことは、社会のすべての担い手が持つべき感覚であり、すべての担い手がその感覚を持つようになることで、その集団の帰属意識や絆が強化されるのである。つまり、社会の担い手の育成の場とするためには、無条件に受容されることも必要なのである。その経験もすることで、集団への帰属意識や絆の重要性を認識できるのである。そのような人が、将来、社会という集団を強化し、衰退させない人材に育てゆくのである。しかし、現実には、学校は、競争原理、協調原理の方が強すぎるし、その原理と共に必ず経験させるべき「無条件の受容」はおろそかになってはいないだろうか。

そして、被災地の勉強会とは、そのおろそかになっているものを補う機能を持っていると考えられないだろうか。益城プロジェクトにおける被災地の勉強会も、一義的には勉強のための会である。学校の勉強に遅れないために、あるいは、学校のテストで良い成績を取るために、この勉強会を開催しているという面がある事は確かである。また、そのために子ども達は勉強会に来るのである。しかし、それ以外の欲求を満たすためにも彼らはきているし、それ以外の欲求を満たすことも被災地の勉強会のミッションであると筆者は考えている。

被災地の子ども達が、学校のテストの成績を上げてゆくことは、容易ではない。被災地ということで、様々なハンディを余儀なくされるからである。なので、勉強会では、一義的な目的を果たすことは、決して容易ではないが、それでも、勉強会に来て、勉強は出来なくても、受容される集団がある事を経験させるミッションが被災地の勉強会にある。そのような経験をした子ども達は、広い意味では、将来の社会の担い手の育成になっているはずである。被災地の勉強会も、将来の社会の担い手の育成の一端を

担っているはずである。そのためには、勉強会において、勉強が出来なくても受容される集団があるという経験をすることが、有効なのである。

(5) 被災地の勉強会の指導方法

被災地の勉強会が、ロジャーズが唱えたカウンセラーの3条件のうちの「無条件の受容」の価値観が優勢な場とするべきならば、ボランティア学生たちは、勉強会に来る子どもに、どんな指導をすればいいのだろうか。まず、この勉強会が、競争に勝つための勉強をする場という考えでは、無条件の受容という価値観を実現できないと考えるべきである。この会に参加して、勉強をして成績を上げようと考えている子どもの勉強の相手をするのも良いだろう。しかし、それが出来ない場合でも、受容される集団があるという体験をする場でもあると考えるべきである。被災地の勉強会に来る子どもは、塾に来るのと同じ理由できているわけではない。なので、勉強しないという行動をとる子どもを、無理に勉強させる必要はない。遊んでいる子どもがいるならば、遊びの相手をボランティア学生がしても良い。おしゃべりがしたいなら、その相手をボランティア学生がしても良い。学校や塾とは違う機能を果たすことをミッションとする勉強会が、被災地の勉強会である。勉強に不安があるから勉強会には来るのだろうが、しかし、そこで、勉強をしてもしなくても受容される集団がある事を体験させるべきなのである。被災地だからといって、特別な心のケアなんかをするよりも、集団から受容される事を体験させる方が、多くの子どもにはずっと必要ではないだろうか。

3. まとめ

本論文では、①被災地の勉強会とは、いかなる機能を果たすべきなのか、そして、②その機能を果たすための指導とはどうあるべきなのか、という二点を理論的に明らかにすることを目的とした。ここまで、勉強面で被災地ゆえの不安を抱えて勉強会に来る子どもに対して、勉強が出来なくても、集団から受容される体験を与えることが、被災地の勉強会が果たすべき機能である事、そのためには、子どもの勉強以外の様々な行動の相手をしてやる必要がある事を論じてきた。この二点を理解出来れば、被災地の子どもの勉強会に参加している学生ボランティアも、勉強会といいながら、勉強をさせていないことに対しての葛藤が少なくなるだろうと思われる。